

中国中等教育日本語教師研修における 観察型教師研修の意義

—中国東北三省・内蒙古自治区高校生プロジェクトワークでの教師の気づき—

松浦とも子、柳坪幸佳、鈴木今日子

[キーワード] 観察型教師研修、中等教育日本語教師研修、視点、気づき

[要 旨]

中国の中等教育日本語教師研修は、2003年から中国教育部直轄の教科書出版社である人民教育出版社と国際交流基金北京日本文化センターが共催で実施している「春季・夏季全国中等教育日本語教師研修」、及び当センター主催で2011年度から始まった「東北三省・内蒙古自治区高校生プロジェクトワーク」と並行して引率の教師に対して行われている「観察型教師研修」がある。「観察型教師研修」での教師の視点と気づきを分析した結果、視点は「生徒」と「内容」に向けられており、その分析レベルの多くは、「生起している事実」「観察者の印象や価値判断」に留まっているものの、内省と改善への意志に結びついていることがわかった。

「観察型教師研修」のようなタイプの研修と、従来からの全国研修はそれぞれに果たす役割があり、今後は各研修の特徴を生かし、地域や参加者、内容を系統立てて実施していくことが求められる。本稿では「観察型教師研修」の意義を確認すると共に、中国における中等教育日本語教師研修について整理し報告する。

1. はじめに

中国の中等教育機関で日本語を教えている教師数は2012年の国際交流基金「日本語教育機関調査」によると約1,200人である。国際交流基金北京日本文化センター（以下、北京日本文化センター）では2003年から中等教育機関の教師を対象に年2回、毎回テーマをたてながら「全国中等教育日本語教師研修」を行ってきた。テーマは「評価」「タスク」などで、毎回のテーマに合わせた講義、教案作成ワークショップ、授業見学などを取り入れている。これは、中国教育部直轄の人民教育出版社との共催で行っており、同社出版の日本語教科書『日語』及び中国教育部制定のシラバスである「課程標準」⁽¹⁾の理解促進を目的の一つとしている。「全国中等教育日本語教師研修」は、中国における唯一の全国規模の研修として定着してきていると言える。

一方、中国の中等日本語教育の一つの特色として、学習者数が東北三省（黒龍江省、吉林省、遼寧省）及び内蒙古自治区に集中しており、この地域の学習者数が中等教育全学習者数の半数以上を占めるといふ地域的な特色がある。そこで、国際交流基金では、2001年から青年教師を当地域に派遣する⁽²⁾など、早い時期から当該地域の教師研修支援を考えてきた。更に2011年か

ら、北京日本文化センターは、この地域対象の「高校生プロジェクトワーク」及び「観察型教師研修」を並行して実施している。この研修の目的は、「観察とディスカッションを通して教師の内省を促すこと」であり、そのために「現場から乖離することなく JF 日本語教育スタンダード（以下 JF スタンダード）を活用すること」も目的の1つとしている。

本稿では、「観察型教師研修」について、2012年度の内容を中心に報告し、教師がそこで得た気づきについてまとめる。2、3章では、「東北三省・内蒙古自治区高校生プロジェクトワーク」観察型教師研修の経過について述べ、4章で当研修における教師の視点と気づきを分析し、さらに5章では従来の「全国中等教育日本語教師研修」と「観察型教師研修」の特徴と意義をそれぞれまとめ報告する。

2. 「東北三省・内蒙古自治区高校生プロジェクトワーク」実施内容

2.1 「高校生プロジェクトワーク」概要

「高校生プロジェクトワーク」は、東北三省及び、内蒙古自治区で日本語を第一外国語として学んでいる高校生が、学校の枠を越えて共に日本語を使用するプロジェクトワークを遂行し交流するのが目的である。また、この地域で日本語を学ぶ高校生は中学から第一外国語として日本語を選択しているものの（内蒙古自治区は高校から）、地方都市にいて日ごろ日本語を使用する機会が少ないため、実際に日本語を使用する楽しさを知り、今後の学習継続の動機とすることも目的としている。

中国の学校の冬季休暇の時期に、各地域の高校2～3校から各校生徒2名^①が北京日本文化センターに集まり、テーマに沿ってインタビューやポスター発表などのプロジェクトワークを3～4人のグループで実施する。「高校生プロジェクトワーク」の講師及び進行役は北京日本文化センターの日本語上級専門家1名と日本語専門家2名（以下、JFBJ 専門家）が務める。

1回目（2011年度）の「高校生プロジェクトワーク」は2012年3月2日～3月4日（2泊3日）の日程で実施し、東北三省から各校生徒2名、計18名の高校生と9名の教師が参加した。2回目（2012年度）は2013年2月21日～2月24日（3泊4日）の日程で行った。以下に詳細を述べる。

2.2 「2012年度東北三省・内蒙古自治区高校生プロジェクトワーク」実施内容

2012年度の「高校生プロジェクトワーク」は2013年2月21日～2月24日（3泊4日）の日程で北京日本文化センターで実施した。2012年度は東北三省に内蒙古自治区を加えた4地域より計11校、22名の高校生と11名の教師が参加した。テーマは「学校生活」である。日本の「学校生活」についてグループごとにテーマを決め、日本人学校の中学生へのアンケート、日本人教師へのインタビューほか、資料を調べた結果等をポスターにまとめて発表した。なお、グルー

中国中等教育日本語教師研修における観察型教師研修の意義

分けは異なる学校の生徒3～4人を1つのグループにし、活動は全てグループごとに行った。2012年度「高校生プロジェクトワーク」の日程を表1にまとめる。

表1 「2012年度東北三省・内蒙古自治区高校生プロジェクトワーク」日程

日 程	生 徒	教 師
1 日目 14:30-15:15 2 月21日 15:15-15:45 15:55-17:10 17:10-17:40 17:40-17:55 19:00-19:30	・オリエンテーション ・グループ分け・グループ名決め (自己紹介・学校紹介) ・日本の学校生活について考える(授業、DVD 視聴、クイズ) [日本語専門家] ・グループのテーマ決め ・アンケートの作り方 ・学習のふりかえり(教師にシート提出)	・教師オリエンテーション 13:45-14:30 (Can-do 説明) [別室] ・授業観察 ・教師ふりかえり 17:00-17:55 [別室] ・生徒の「ふりかえりシート」にフィードバック
2 日目 8:30-9:30 2 月22日 9:30-10:30 10:40-11:25 13:30-15:30 16:00-17:00 17:10-17:40	・アンケート作成 ・インタビュー内容検討 ・授業「インタビューのし方」[教師 A] ・日本人学校訪問(アンケート・インタビュー) ・アンケート・インタビュー結果まとめ ・学習のふりかえり(教師にシート提出)	・授業観察 ・教師ふりかえり 16:00-17:00 [別室] ・生徒の「ふりかえりシート」にフィードバック
3 日目 9:00-11:15 2 月23日 13:00-15:00 15:00-15:45 15:50-16:50 17:00-17:30	・調べ学習(図書館・インターネット) ・発表準備(ポスター作成) ・授業「発表のし方」[教師 B] ・発表準備・発表練習 ・学習のふりかえり(教師にシート提出)	・授業観察 ・JFスタンダード講義 10:00-11:15 [別室] ・授業観察 ・教師ふりかえり 16:00-17:00 [別室] ・生徒の「ふりかえりシート」にフィードバック
4 日目 8:30-10:50 2 月24日 11:00-11:30 11:30-12:00	・ポスター発表会 各グループ発表15分(質疑応答含む) ・投票、4日間のふりかえり ・修了式 ※後日感想文提出	・聞き手として参加 ※後日レポート提出

(1) 授業

テーマ授業「日本の学校生活について考える」は、JFBJ 専門家が担当した。「学校生活」というテーマについて、生徒が自分たちで考えたり、気づいたりできるよう、教師と生徒のインターアクションや、生徒同士のグループ作業など、意識的に「しかけ」を施した。「インタビューのし方」、「発表のし方」の授業については、昨年度の「高校生プロジェクトワーク」に参加した中国人教師2名に事前に依頼した。

(2) 目標 Can-do の作成

各活動や授業は、JFBJ 専門家が JF スタンドアードを参考に「目標 Can-do」を作成した。表 2 に各授業・活動の目標 Can-do をまとめる。なお、「インタビューのし方」と「発表のし方」の目標 Can-do は上述の授業を担当した各中国人教師が作成した⁽⁴⁾。

表 2 目標 Can-do ・評価一覧

日程	授業・活動内容	目標 Can-do	評価
1 日目	1. グループ分け (自己紹介・学校紹介)		
	2. 日本の学校生活	①日本の学校生活について見たことをまとめよう	自己
		②初めて会った友だちと話してみよう	自己
	3. クイズ		
4. テーマ決め			
2 日目	1. アンケート作り	知りたいことをわかりやすくアンケートにまとめよう	自己 教師
	2. インタビューのし方 (授業)	学校生活について友だちにマナーよくインタビューしよう	
	3. 日本人学校訪問 日本人中学生との交流	①自分の学校の特徴を説明しよう	自己
		②日本人の生徒の質問に答えよう	自己
	4. 日本人学校訪問 日本人の先生へのインタビュー	③初めて会った日本人にあいさつしよう	自己
		④日本人の先生に聞きたいことを質問し、答えを聞こう	自己
		⑤日本人の先生の話聞いて、もっと知りたいことを質問しよう	自己
日本人学校訪問について		教師*注	
3 日目	1. 発表のし方 (授業)	①伝えたい情報を分かりやすくまとめて発表しよう	
		②友だちの質問に答えよう	
		③友だちの発表をよく聞いて理解しよう	
		④友だちの発表に対して、自分の意見や感想を言ったり質問したりしよう	
	2. 発表の準備	①本やインターネットで発表に必要な情報を調べよう	自己
	②調べたこと・わかったことをわかりやすくまとめよう	自己	
4 日目	1. プロジェクトワーク発表会	①調べたこと・わかったことを分かりやすく発表しよう	自己
		②友だちの発表をよく聞いて理解しよう	自己
		③友だちの発表に対して自分の意見や感想を言ったり質問したりしよう	自己

(注) 教師は生徒の日本人学校訪問時の態度や気付きの記述を含め、全体を評価しフィードバックを行った。

(3) ポートフォリオ

ポートフォリオを導入し、生徒は毎日、「学習のふりかえりシート」に上記の目標 Can-do に照らした自己評価と感想を書いて各学校の教師に提出した。自己評価は「がんばろう・もうすこし・できた・すばらしい」の4段階である。教師は毎回それにコメントを書いて翌日生徒に返却し、フィードバックを行った。アンケート作りと日本人学校訪問全体については、コメントのほか、「がんばろう・もうすこし・できた・すばらしい」の4段階の教師評価も行って生徒にフィードバックした⁽⁵⁾ (図1)。なお、最終日の「ポスター発表」については、発表を聞いた生徒と教師が各発表の質疑応答の終了後に付箋に全員コメントを書いてフィードバックを行った。

図1 ポートフォリオ 「学習のふりかえりシート」生徒の記述と教師のコメント例

2012年度 高校生プロジェクトワーク 2日目 2月22日(金)

目標 Can-Do ⑤日本人の先生の話を聞いて、もっと知りたいことを質問しよう

自己評価

がんばろう **もうすこし** できた すばらしい

(感想) 発言しないけど、何問もうまく出して嬉しかった。何が問題があって、そのヒントも切らないように質問をした。

⑤日本人学校を訪問して気づいたこと
 スーパーに買えるのはもちろん、どこでも買えないものはある。小豆はほんのり甘いのが好き。水さいのどろろに滑るととても滑らかなあ。

先生の評価 日本人学校訪問について

がんばろう **もうすこし** できた

先生のコメント

今日お話を聞いて、とても楽しかったです。生徒の話を聞いて、とても楽しかったです。生徒の話を聞いて、とても楽しかったです。生徒の話を聞いて、とても楽しかったです。

2012年度 高校生プロジェクトワーク 2日目 2月22日(金)

今日の学習をふりかえろう 2日目 2月22日

学校名 _____ 名前 _____

①アンケート作り

目標 Can-Do 知りたいことをわかりやすくアンケートにまとめよう

自己評価

がんばろう **もうすこし** できた すばらしい

(感想) 準備がよくできたので、時間が足りなくてあまり満足しません。あと、もっとがんばろうと思います。

先生の評価

がんばろう **もうすこし** できた すばらしい

先生のコメント

今日の発表は、とても、すばらしいです。とても、すばらしいです。とても、すばらしいです。とても、すばらしいです。

アンケート よくできていたアンケートでした。初めて、日本語の字を打ってみたい。すばらしい。チームワークがよくできていたようです。

これについての集計は以下の通りである。

表3 振り返りシートの集計

一番観察していたのは何ですか。	1日目	2日目	3日目	4日目
生徒の様子	6名	1名	2名	6名
教師の様子	0	2名	0	0
授業の流れ	2名	4名	3名	0
授業目標と実際	2名	3名	6名	0
その他	0	1名	0	1名

(1日目と4日目はシートを提出しない教師がいた)

「その他」に関しては2日目が「教師と生徒との交流」、4日目が「発表の流れ」という記述があった。

これを見ると、初日と最終日は「生徒の様子」が6名と多い。1日目には、「うちの学校の生徒は会話に慣れていない」「初めてなので生徒は緊張している」「生徒間でも日本語の発話が多い」「生徒が興味深くやっている」という記述が見られ、引率の教師が生徒を見守り心配している様子、また生徒の積極的な参加態度に安心している様子、或いは意外に感じている様子も読み取れる。最終日は、ポスターの発表なので、「自信を持って発表する姿に感動した」と生徒の姿を見つめる一方で「レベルの差が大きくて、先生としていろいろ反省した」などの記述も複数見られた。

2日目と3日目は「生徒」を観察した教師が減り、「授業の流れ」及び「授業目標と実際」を観察した教師が増えている。しかし、自由記述には生徒の様子を観察している様子が書かれている。例えば、「授業の流れ」を一番観察したという4名のうち1名は「生徒の様子は昨日よりだいぶ元気になったと思います。先生の質問に対してできる限り答えて頑張ったと思います。ただ、授業中もし先生に注意されなかったら、メモをすることに気づかなかったということがこれから気を付けたいと思います」と記述し、1名は「インタビューの仕方の授業はどんな形でしているか、生徒の反応はどうか。インタビューをどのように生徒に教えるか」と書いている。ここから、複数の視点で観察をしている様子がうかがえる。

「教師と生徒との交流」を観察したという教師は、「生徒が会話したり、アンケートを作ったりするとき、スムーズにできなかった場合には先生がどうやって助けているのか一番観察した」と書いている。それは、授業という枠をこえて、プロジェクト活動全体の中でも観察が続けられていたことを意味する。

3日目は教師Bが用いた具体的な内容提示の方法や、自己評価リストに対する感想を記述した人が複数いた。それが「授業目標と実際」を観察したという意識につながったと推察できる。

教師毎の特徴については4日間のデータでは言い切れないが、3日目でも「生徒が悩んでいた」など生徒から視点が動かない教師もいた。また、今回の研修で授業を依頼した2人の教師は1日目から3日目にかけて観察した一番の項目として「授業目標と実際」を挙げている。

4.2 データ2 教師レポートの分析から見る視点と観察内容

松浦・柳坪(2013)では、秋田(2008)の、授業研究会での「教師の語りのカテゴリー」を参考に、初年度「観察型教師研修」でのディスカッション記録を分析した。「何を観察しているのか」の観点から、会議での発言に「教師の教え方」「教師の反応」「生徒の態度」「教材」「しかけ」のタグをつけ、「何について考えているのか」の観点から、「しかけの意図」「授業目標」「評価」「授業の流れ」「現場との比較」のタグをつけ、教師の学びを考察した。

その結果、目標言語を使用しなければ課題を達成できない「プロジェクトワーク」という協働作業の中で、日頃接している自分の生徒たちがどのように動いているか、観察型教師研修によって、教師はそれを観察しつつ自分の授業を振り返ることが明らかになった。また、メタ的な意味生成が可能な教師は、観察内容から考察を深め、さらに現場の現状と研修の目的をも関連づけることがわかった。一方、学びの言語化が難しく、観察内容が考察へと深まらない教師もいた。

今回は、研修終了後、参加した各教師から提出されたレポート⁷⁾を分析することで、「観察型教師研修」を通して、教師が視点を向ける対象、及び分析のレベルを考えた。

カテゴリー分けをしたのは教師9人分のレポートからの185文である。これらの文が視点を向けている対象、及びそこで行われている分析のレベルをJFBJ専門家3名で判断した。

1文の中に複数の視点が混ざっているものは、特に重み付けはせず、そのまま複数の視点をカウントした。その結果、視点の対象は「過去、生徒、教師、内容、流れ、社会、未来、事後」の8つに集約された。松浦・柳坪(2013)では、「内容」を「教材」「しかけ」に分けたが、そこまで詳細な記述がなかったため今回はそれを1つにした。

また、ここでいう「分析レベル」は、森(1999)の以下のカテゴリーによる。これにより、「観察型教師研修」の観察対象の広がりを見るだけでなく、観察視点がメタ認知につながる不可視的側面を捉えている様子を明らかにできると考える。

- i. 観察者の感想・意見を加えず、生起している事実を述べている。
- ii. 観察者の印象や価値判断を伴う発話をしている。
- iii. 理由や根拠を伴った印象や価値判断を行っている。

上記i～iii「分析レベル」の下位レベルとしては、i「事実」、ii「感想、推測、判断、内省、意志」、iii「理由ある判断、問題意識、代案」が最終的に残った。教師の記述がどのレベルかを判断するのは根拠が曖昧な場合もあったが、文脈から考えて一文の意味を理解し、JFBJ

中国中等教育日本語教師研修における観察型教師研修の意義

専門家3名で判断した。例えば、「心の中では学生に考える時間をあげるといふ考えがありますが、実際には先生自分が話してしまうんです」という記述は、文脈からこの文中の「先生」が授業を担当した教師と思われるので、その教師の気持ちを推測しているところから「推測」とし、またそれは後に続く「中国人先生みんなが持っている欠点だと思っています」という記述から判断して、その教師一人だけではなく一般的な問題と捉えていることがわかるので観察者の「問題意識」と捉えカウントした。

表4は、分析レベルと記述例及び視点である。この表に挙がっていない観察視点として、「事後」「社会」があるが、前者は「そして戻ってから、二人の生徒は毎日日本語の授業で興味深く受けています」などの研修後の事実を記述、後者の例としては「近年、中国では高分低能といふ（成績の）⁶⁾点数は高くても能力が低いという言葉がとてはやっています」などの社会的事実への視点がある。

なお、図3は観察視点の数量、図4は分析レベルの数量を表した。

表4 分析レベルと記述例及び視点

分析レベル	記述	視点
i	事実 今回は生徒に自分のグループの名前をつけさせたり、テーマをきめさせたりしました。	内容
ii	感想 特に、各学校からの生徒たちのチームワークに関心させられました。	生徒
	判断 先生は全部のことを話す必要はありません。	教師
	内省 伝統的な教授法は教師と生徒の発展を制約していたことを深く感じました。	内容・教師・生徒・過去
	推測 そのときに、生徒が日本語の面白さがわかったと思います。	生徒
	意志 私はこれを作文の授業で生かしてみたいです。	未来・内容
iii	理由ある判断 プリントもたくさん準備したし、授業が、簡単な部分から、難しい部分への移動ということが見てすぐわかりました。	内容・流れ・教師
	問題意識 そんな生徒が学校を出て、社会に入るとき、どうなるでしょうか。	生徒
	代案 初めの日にもう少し詳しく4日間の日程を確認したらどうかと思います。	流れ・教師

図3 教師レポートから見た教師の観察視点

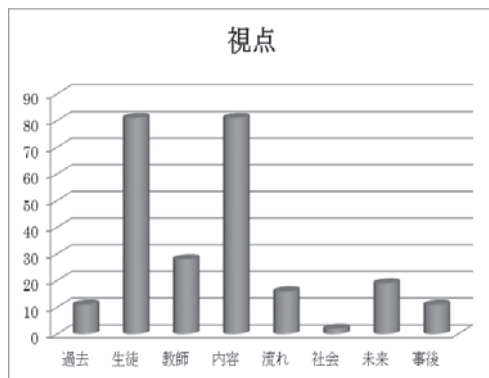
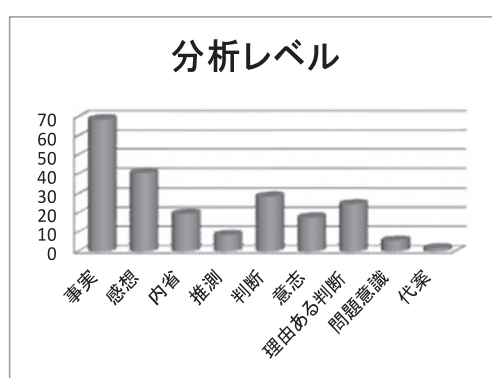


図4 教師レポートから見た分析レベル



以上の結果を見ると、「観察型教師研修」では、「生徒」及び「内容」に視点が注がれているのがわかる。それは松浦・柳坪 (2013) で、ディスカッション記録を分析して得た結果と同様である。が、レポートの分析によって更に明らかになったことは、観察者が「過去」の自身の授業に視点をあてて内省する場合、「未来」の授業への意志を語る場合があるということである。

例えば「いろいろな方面から見れば、生徒たちは私が思っていたよりずっと潜在能力があると思います。ですから、難しいと思ってあまりさせていなかった練習をさせたいと思います。そして、これから、簡単に生徒にとって難しいと決めないようにします。」と意志が語られている。これは、授業観察直後のディスカッションでは見られにくく、数日経た後に書いたレポートに現れる特徴でもあろう。レポートの中には現場に帰った後、生徒や教師自身にどのような変化が見られたかを記述しているものもあった。「会話不足に対して、今の授業でできるだけ生徒に日本語でしゃべる機会を与えてみます」という会話指導を重視し始めた報告などがあった。

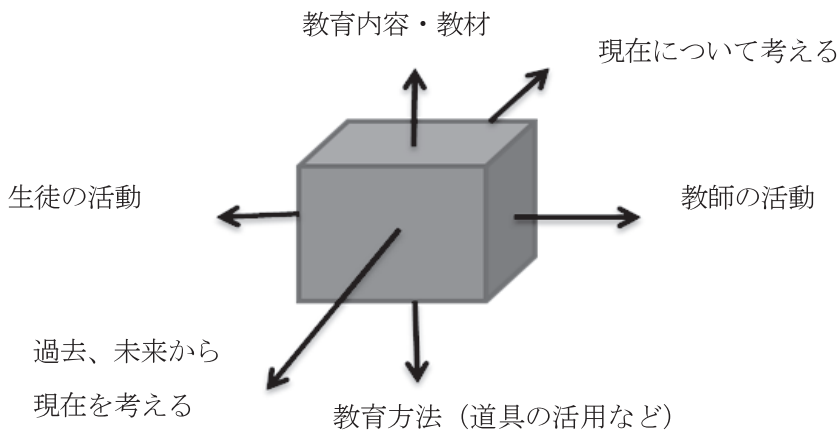
東北三省や内蒙古自治区の学校のように日本語が第一外国語である場合、大学受験のための日本語学習という点は無視できず、研修の講義などで「使える日本語」を強調しても、現場とは相容れないものとして捉えられることも多い。しかし、「観察型教師研修」において自分の生徒のコミュニケーション力や生き生きとした態度を目の当たりにして、アウトプットの必要性を強く意識する教師の記述が複数見られる。

小柳 (2008) は、観察学習の方法として実習生に以下の図を示しているが、「過去・未来から現在、目の前で起こっている事象を考えた」記述は学部実習生には見られないという報告がある。

今回の結果を見ると、現職教師である観察者は立体的視点で授業を観察していたといえるだろう。

さらに、分析レベルを見てみると、カテゴリー i、ii の「事実、感想、内省、判断」が大部

図5 振り返る際に語られている視点の関係 (小柳 (2008) より引用)



分を占めるが、可視的側面の観察だけでなく、その根拠など不可視的側面を考察していることもわかる。どのように考察を深めさせていくかが今後の課題として残る。

また、今回、当センター日本語専門家の授業と、中国人教師の授業を比較しての記述も少なからず見られた。比較はこちらが意図していたことではなかったが、メタ的な考察につながるためのきっかけになるならば、否定されるべきではないだろう。

以上、データ1振り返りシートとデータ2教師レポートの分析を通して、「観察型教師研修」で教師が何を見て、何を考えたかを見てきた。中国で10年間続けている「全国中等教育日本語教師研修」については、視点と分析レベルに関しての比較のデータは現在のところ収集していないが、以下に、その研修の概要と「観察型教師研修」との相違点についてまとめ、それぞれの研修の特徴と意義を整理する。

5. 春季・夏季全国中等教育日本語教師研修と観察型教師研修

既に述べたように北京日本文化センターでは「観察型教師研修」とは別に、2003年から春と夏の年2回、中学校の教師を対象とした「全国中等教育日本語教師研修」（以下、全国研修）を継続実施している。同研修は中国教育部直轄の出版社である人民教育出版社との共催で、参加者数は例年春は約50名、夏は50名から90名である。ここ数年の内容は春に現地の中学・高校における授業見学及び授業検討会、夏に教案作成作業で定着している。

中国の中等教育機関において、日本語は英語・ロシア語と並び大学受験で選択可能な正規の外国語科目の一つに位置付けられ、シラバスとして「課程標準」が制定されている。2003年よ

表5 春季・夏季全国中等教育日本語教師研修プログラム例

春季 全国中等教育教師研修プログラム
(2013年3月)

テーマ：語彙の教え方を考える

一 日 目	午前	
	午後	テーマに関する講義①②
二 日 目	午前	日本語授業体験①②
	午後	授業見学準備、教案作成作業
三 日 目	午前	授業見学
	午後	授業検討会
四 日 目	午前	教案教論、振り返り
	午後	

夏季 全国中等教育教師研修プログラム
(2013年7月)

テーマ：タスクと目標のつながりを考える

一 日 目	午前	『日語』改訂について
	午後	テーマに関する講義①②
二 日 目	午前	班活動①（事前課題FB、教案作成準備、教案作成）
	午後	日本語授業体験①②
三 日 目	午前	班活動②（教案FB、教案改善）
	午後	班活動③（教案共有、優秀教案決定、班内振り返り）
四 日 目	午前	日本文化体験（JICA 隊員）
	午後	優秀教案発表、教案説明、振り返り

り行われてきた「全国研修」、特に夏季の研修は人民教育出版社の日本語教材『日語』を用いての教案作成作業が活動の中心で、その際教材の背景にある「課程標準」の理念をふりかえることも多い。

2011年より実施している「観察型教師研修」と従来の「全国研修」の相違点として、第一に研修が拠り所とする基準の違い、第二に研修の方法、第三に教師が向ける視点、第四に参加者の地域及び地域的特性の違いが挙げられる。

まず、「観察型教師研修」は「JFスタンダード」を基準とするのに対し、人民教育出版社出版の『日語』を使用した「全国研修」の基準は「課程標準」である。課程標準とJFスタンダードには、課題遂行や異文化理解などの共通点が見られる一方、JFスタンダードはその特徴として、現場でより使いやすいようにJF Can-doを提供、更にMy Can-doの作成を推奨している。「観察型教師研修」では、今回一部教師に自分で実際にCan-doを作成し、授業をするよう依頼した。それによって、参加者が授業のデザインに主体的に関わる意識が生まれることを狙った。また、参加教師には生徒のポートフォリオに対し毎日コメントを書いてもらい、対話のツールとしてのポートフォリオを実際に体験してもらうことを狙いその効果を得た。主体的な授業デザインとポートフォリオの活用はJFスタンダードを利用した研修の特徴とすることができる。

第二に、研修方法の違いである。「全国研修」は参加人数が多く、中心となるのは座学である。春季研修では現地の中学・高校を訪問し、日本語授業の見学と授業検討会を行っているが、春季研修での授業見学で授業を受けるのは自身の生徒ではなく受け入れ校の生徒である。「全国研修」では教師の気づきに関するデータを集めていないが、研修後に実施した参加者アンケートの自由記述を見ると、「先生の模擬授業が素晴らしかった」「先生方の授業を見学して参考になった」など、観察型研修の視点「教師」に類似したコメントが現れる一方で、「生徒」に関する記述は全く見られなかった。このような参加者の視点の相違が三点目として挙げられる。違いが現れた理由については「全国研修」のデータの収集とともに更なる分析が必要ではあるが、授業に参加しているのが自身の生徒であるかどうかに関わっていることが推測される。

第四に、参加者の学校のある地域特性の相違がある。東北三省及び内蒙古自治区では大学受験科目として日本語を勉強する生徒が多く、学校での指導も語彙や文法学習を中心とした暗記学習に偏りがちである。暗記中心の授業を行い、かつ諸事情から「全国研修」への参加が困難なこれら地域の教師を対象に、生徒が実際に日本語を使って「何かができる」ことを直接観察する同研修は、一定の意義を果たすものとする。

以上、「観察型教師研修」の特徴を「全国研修」との比較から検討したが、全国研修は人民教育出版社との共催であり、「観察型教師研修」が北京日本文化センターの主催であるという点は根本的違いである。これらの相違点を活かしつつ、補完的あるいは相乗効果が図れる研

修システムを作ることが今後の課題となるだろう。

図6 「全国中等教育日本語教師研修」と「観察型教師研修」

春季全国中等教育 日本語教師研修	夏季全国中等教育 日本語教師研修	観察型教師研修
<ul style="list-style-type: none"> ・方法：授業見学、検討会 ・基準：課程標準 ・視点：授業内容、教師 ・参加者：自由参加・全国 ・主催：北京日本文化センター、人民教育出版社（共催） 	<ul style="list-style-type: none"> ・方法：座学、教案作成 ・基準：課程標準 ・視点：授業の流れ、内容 ・参加者：自由参加・全国 ・主催：北京日本文化センター、人民教育出版社（共催） 	<ul style="list-style-type: none"> ・方法：プロジェクト観察 ・基準：JF スタンダード ・視点：生徒の様子 ・参加者：指定・東北三省及び 内モンゴル自治区 ・主催：北京日本文化センター (単独)

6. まとめ

以上、北京日本文化センターにて実施した「観察型教師研修」の概要紹介及びそこから見た教師の気づきについての報告を行った。観察型研修においてはその視点と分析レベルから、教師が生徒の学びや成長に強く注目し、今までの授業について振り返り、改善事項を確認するなど、教師の学びが強く促されていることがわかった。まだデータが少なく、その効果については更なる分析が必要であるものの、タスクに臨む自分の生徒を観察し、またポートフォリオの活用主体的に参加した経験が、教師の気づきに対して一定の効果をあげたと考えられる。

中国の中等日本語教師研修の全体像について考えると、従来の「全国研修」は自由参加であり、毎回の内容やシステムに段階性がないことが課題として挙がっていた。今回、「観察型教師研修」と従来の「全国研修」との比較を基準・方法・視点・参加者・主催の五点から検討したが、今後は各研修の特徴を生かし、地域や参加者、内容を系統立てて実施していくことで、相乗効果を図ることが期待される。「観察型教師研修」の参加者は、現在、東北三省と内モンゴル自治区という特定の地域限定であるが、その効果と必要性次第では、違う形への移行も考えられる。それぞれの研修の効果を確認しつつ特徴と必要性を整理し、研修システムを考えていくことが必要であると考えられる。

〔注〕

^①中国の課程標準は国が定めた教育課程の基準である。義務教育課程及び高級中学(日本の高校に当たる)

の何れについても制定され、各教科の目的や内容等が記されている。外国語科目としての日本語は英語・ロシア語と並び教育課程に位置づけられており、「義務教育 日語課程標準」及び「普通高中 日語課程標準」が作成されている。

- ^② 東北三省への青年教師及びジュニア専門家（当時の呼称）派遣は2001年から実施されていた。現在は派遣されていない。
- ^③ 参加者の学習歴の内訳は東北3省の参加者は約4年半、内蒙古自治区の参加者は約1年半で、日本語のレベルはJFスタンダードA2-B1程度。参加校の選定については各省の教員に依頼。なお、教員は各地域の中等教育機関の日本語教師の指導的役割を果たしている。
- ^④ 参加者の日本語学習歴の平均からレベルをA2-B1と設定し、CEFR、JFスタンダードのCan-doの記述を基にして作成し、さらに学習者がわかりやすいように書き換えた。
- ^⑤ 目標Can-doを教師に意識してもらうため、プロジェクトワークの具体的な成果物であるアンケートについては、教師は生徒の振り返りシートにコメントを書くだけでなく、教師評価も行った。日本人学校訪問については、各活動場所が分かれており、教師は自校の生徒の様子だけを観察することは難しいため、個々の目標Can-doではなく、日本人学校訪問全体を評価した。
- ^⑥ 各作業にも観察すべき面があり、本研修では調べ学習などの冒頭部を観察してから別室に移るなどの配慮はしたが、どの時間で振り返りディスカッションを行うかは工夫が必要である。
- ^⑦ 事後レポートは自由記述でA4用紙1枚以内、〆切は実施1か月以内、中国語でも日本語でも可とした。
- ^⑧ (成績の)は、筆者の解釈。後ろに「そんな生徒が学校を出て社会に入るとき、どうなるか心配です」と続く。

〔参考文献〕

- 秋田喜代美 (2008) 「授業検討会談話と教師の学習」、秋田喜代美・キャサリン・ルイス編著『授業の研究 教師の学習』114-131、明石書店
- 小柳和喜雄 (2009) 「学部から大学院につながる体系的な観察実習の方法」奈良教育大学教職大学院研究紀要学校教育実践研究1、79-86
- 松浦とも子・柳坪幸佳 (2013) 「観察型教師研修での教師の気づき」日語教学研究会2013大会 予稿集
- 森博文・北川隆・廣瀬勝弘・坪田信道 (1999) 「体育の授業における「観察」に関する理論的検討」体育科教育学研究16 (2)、13-26
- 森博文・廣瀬勝弘・坪田信道 (2000) 「発話プロトコルにみる体育授業観察者の「思考」に関する研究」大阪教育大学紀要、V、教科教育 49 (1)、182-195